

「えびす」の芸能名称に関する一考察

中村茂子

はじめに

一 祝福芸としての「えびす」の芸能

1 阿波木偶三番叟まわしの「えびす舞」

2 万歳に取り入れられた「えびす」

3 七福神舞の「えびす」

4 その他の祝福芸にみる「えびす」

二 神楽に取り入れられた「えびす」

1 関東地方を中心とした江戸里神楽系神楽にみる「えびす」

2 茨城県上山川諏訪神社太々神楽の「恵比寿（鯛釣り）の舞」

3 高知県物部村いざなぎ流御祈禱の「えびす神楽」

三 「えびす」の芸能・その発生と展開

おわりに

はじめに

平成二〇年度国の「登録有形民俗文化財」の一種として、「阿波

木偶の門付け用具」一六三点（所有者―阿波木偶箱廻しを復活する会 所有者住所―徳島県徳島市）が登録された。¹ 筆者は、平成二一年三月六日に明治大学駿河台リバイタワー内ハリバティホールVで行われた「門付け芸、舞の宇宙―祝福と予祝（第二二二回 現代史研究会）」という催物で、偶然に「阿波の木偶まわし」実演を観賞する機会に恵まれた。² また、実演に先立って解説を担当された辻本一英氏の著書『阿波のでこまわし』を会場内で購入した。³ 辻本氏による実演の解説や著作、および当日の実演によれば、「阿波木偶まわし」は「三番叟まわし」と「箱廻し」で構成されているという。正月の祝福芸であり、門付け芸としての「三番叟まわし」は、最初に千歳、翁、三番叟の木偶三体を舞わして家人の無病息災、五穀豊穡を祈り、最後に「えびす」を舞わして豊漁、商売繁盛を予祝した。「三番叟まわし」の最後に登場する「えびす」は最も華やかな舞であり、人々に喜ばれ、待たれている演目であるにもかかわらず、門外漢にとって芸能種目名だけでは、その存在さえ知ることができない。この経験をきっかけに、過去にも似たような経験をした

記憶がよみがえった。

その一つは、茨城県指定無形民俗文化財「結城市上山川諏訪神社太々神楽」第七座・「恵比寿（鯛釣り）の舞」である。筆者がこの舞を見たのは、平成一七年度に茨城県指定の無形民俗文化財となったこの神楽の予備調査として、平成一六年四月三日の上山川諏訪神社祭礼に奉納された時、また平成一七年一〇月三〇日（日曜）に特別に公開された時、平成二〇年一月八日（土）茨城県石岡市で行われた「第23回国民文化祭いばらぎ」の一端として参加した「第32回茨城県郷土民俗芸能の集い」で演じられた時の三回である。後に記すように「恵比寿（鯛釣り）の舞」は、他の演目の四倍も時間を費やして演じられ、三回とも常に観客の注目の的になっていた。

二つ目は、茨城県指定無形民俗文化財「水戸大神楽」の柳貴家勝蔵社中による滑稽掛け合い「えびす大黒」である。平成二〇年一月二二日（火）に柳貴家勝蔵社中が、銚田市冷水^{ひやみず}で年場^{としば}と称している正月最後の各戸巡りをしている一軒で、余興芸の最後に演じたのが滑稽掛け合い「えびす大黒」である。黒紋付きで正装した親方である勝蔵師と弟子の二人が、さまざまな小道具を駆使して「鯛釣り」の様子を演じて見せ、最後に「めでたいな めでたいな 当家にえびす大黒舞い来たり」と始まる数え歌風の歌を簡単な身振りをつけながら囃子方と掛け合いで歌って終了した。

えびす神は漁業神・商業神・農業神、また七福神を代表する神として庶民に親しまれ、厚い信仰を得ている。しかし、芸能として演じられる「えびす」は七福神舞の一神、神楽や祝福芸の一部、囃子

舞などに取り入れられた一演目として演じられることはあっても、「えびす」という芸能種目名としては伝承されていない。本論では、全国的にさまざまな生業の庶民に幅広く信仰されているえびす神と、「えびす」の芸能との間に横たわる目に見えない壁のようなものの存在が、なんであるかを考察してみたい。

一 祝福芸としての「えびす」の芸能

「えびす」の芸能の発生と展開は、兵庫県西宮市広田神社の撰社であった、西宮神社に所属していた傀儡子^{くぐつ}たちが、西宮神社の信仰を広めるために演じたえびすの木偶^{でく}による鯛釣りの芸能「夷まわし」、「夷かき」と切り離して考えることはできない。江戸時代初期に淡路に渡った傀儡子と浄瑠璃語りの芸が合体することによって、現在日本を代表する伝統芸能の一種・人形浄瑠璃文楽を発生させる源流となった。

1 阿波木偶三番叟まわしの「えびす舞」

「夷まわし」は室町時代に宮中にも参内し、鯛釣りや猿楽の物まね芸を演じたと伝えられている。その芸を継承しているという阿波の「三番叟まわし」は、正月に徳島県ばかりでなく、西日本を中心とした地域の各戸をめぐって荒神を拝し、木偶に能の「翁（式三番）」を舞わせ、無病息災、五穀豊穰を祈願し、その後にはえびす人形を舞わして商売繁盛、豊漁を予祝する祝福芸、門付芸である。祝

福芸、門付芸としての「三番叟まわし」の芸態は、四体の木偶（千歳・翁・三番叟・えびす）や諸道具を大きな木箱に収納し、これを人形浄瑠璃を演じる「箱まわし」の木偶と諸道具を入れた木箱と共に一対で、天秤棒で担いで家々を訪問した。玄関に入って一方の木箱から千歳・翁・三番叟の順番に木偶を取り出して舞わせ、最後に演じる「えびす舞」は、木箱を舞台のようにして舞わせたが、その姿は一九七〇年代以後に見られなくなった⁴。先に記したように、筆者は二〇〇九年三月六日に明治大学リバティホールで行われた「第二二二回 現代史研究会 門付芸、舞の宇宙―祝福と予祝」という催物で、中内正子・南 公代氏という若い女性二人によって演じられた「三番叟まわし」と「箱まわし」を見た。中内正子氏は、一九九五年に組織された「阿波木偶箱廻しを復活する会」に参画し、一九九九年に当時唯一の伝承者であった「三番叟まわし」の師匠に弟子入り、師の門付けに三年間同行して、その技術や得意先を継承した。師匠の引退後は正月の門付けを行うようになり、二〇〇五年には七〇〇戸の家々をめぐる。現在、中内氏が代表を務める「阿波木偶箱廻しを復活する会」では、正月の門付けが終わると全国各地で行われるさまざまなイベントの公演に参加している。辻本一英氏は『阿波のでこまわし』の中で、「三番叟まわし」が正月神事として定着していたのに比べて、「えびすまわし」や「大黒まわし」は、祝福の言祝ぎ芸であったため、賤視される場合があったことを「言祝ぎ歌の詞章」とともに記しておられる。

2 万歳に取り入れられた「えびす」

万歳は新年に家々を訪れて祝言を述べる門付芸の一種で、歴史的には平安時代末期に登場していた千秋万歳が源流であると伝えられている代表的な祝福芸である。万歳に「えびす」は、どのような芸態で取り入れられているかを検証してみよう。

① 大和万歳の「戎舞」

現在大和万歳は行われていないが、昭和二八年に岡田弘氏が大和万歳最後の伝承者であったという、宮本政一より採集したという詞章の中に「戎舞」があった。当時は五演目が伝承されていて、「柱立」「田植舞」「南蛮胡椒」「戎舞」「月歌」の順番で、次々と演じるのが正式であったという。「戎舞」の詞章は、以下のような意味不明な内容になっている。

「そもそも西宮 戎三郎殿 本地をくわしほいたずね たずね申せば わが朝^{ちやう}にいて じよてこうては 大神宮の 一の后にはいわれそうなる たてまつるたてまつる 総じて戎の 生れひるまうやれやおんばさん いまの目出たしことは（中略）このようできたの御殿の若い戎に しゃときせ きせたてまつる 思いみなとに船漕きよせ あきないことはとうるてあるて からり百万石 若戎若ように 目出たし目出たし」。

② 三河万歳・尾張万歳・越前万歳の「七福神」

三河万歳・尾張万歳は、江戸時代を通して新年に江戸に出て、三

河出身武士の屋敷を中心に訪問し、祝福芸を演じたほか三河・尾張地方の城下町を中心に、武家屋敷や豪農などを定期的に訪れて祝賀を行っていた。また、越前万歳もその活動は江戸時代になってからで、越前、加賀の各地で厚遇を受けた。『大衆芸能資料集成』第一巻に所収されている「三河万歳」および「尾張万歳」の詞章中には、数え歌の「七福神」が採録されており、「三河万歳」の場合は弁財天を除いた六福神を歌い込み、最後に「(前略) 恵比須大黒集まりて 当家へさしてのりこめる 金の湧く声唸り声 (以下略)」というものである。この詞章は、「西尾市の三河万歳」(西尾市史編纂室編 西尾市教育委員会 昭和四七年刊行) から転載されたもので、岡田氏によれば現存者で演じられる人はいないという。また「尾張万歳」の場合は、「一つとせ 広いお居間に福の神 七人揃うてお酒盛り 琵琶をひくやら歌うやら 二つとせ 福徳円満限りなく 出る人入る人えびす顔 笑う門には 福きたる (以下略)」というもので、これは花房喜三の覚え書きを掲載したものであるという。さらに「越前万歳」の場合は、以下のような詞章になっている。「徳若に御萬歳とふや 有難かりける君が代は 栄へまします瑞 しろしま かや 先づ初春の御慶には 無量の宝を授づけんと宝尽しの御船に おのくとり乗り給いつ、 祝い港へ着き給うその七福のかずくを 七番めの萬歳と (中略) 続いて二番の御船は 時に乗りたる若夷 釣竿振りもふかいがいしく げにもめでたき大鯛の (以下略)」。その他、鹿野正男「会津萬歳師聞き書 (昭和五十八年九月)」にも、「七福神」の詞章が掲載されている。

③ 秋田万歳の囃子舞

秋田万歳の発生については、慶長年間(一五九六―一六一五)に常陸の佐竹氏移封とともに、三河系万歳が伝播したという説と、元禄時代(一六八八―一七〇四)に、尾張万歳が江戸風化した江戸万歳を取り入れ、秋田独自の变化を遂げたものという二つの伝承がある。明治時代には、三〇組を数えることができたという。万歳の芸態は、大夫が唱える正式な詞章に、才蔵が相の手として「づくし物」を入れながら進行する。その他に、余興芸として才蔵話・民謡・囃子舞を演目に加えている。囃子舞の一演目として「えびす舞」が伝承されている。その詞章は「こら何舞もかに舞も おつとりおえで とりおえで こら何舞もかに舞も こらおつとりおえで えびす舞には誰れ彼れど モツケガツパもくのじょう 何網はよかるか (中略) おつげにしゃしゃれ えびす舞はミツサイナー えびす舞はミツサイナー」というものである。¹⁰

以上、万歳に取り入れられた「えびす」は、最も古い歴史を持つ大和万歳に「戎舞」があつて、意味不明の詞章が伝承されている他には、「七福神」として登場している場合が多い。秋田万歳に取り入れられている囃子舞の「えびす舞」は、万歳ばかりでなく新潟県の綾子舞や青森県のえんぶり、岩手県の田植踊にも余興芸として演じられている。

3 七福神舞の「えびす」

七福神が、現在のようなえびす・大黒・毘沙門・弁天・布袋・寿老人という構成に定まったのは江戸時代後期以後で、江戸時代前期にはえびす・毘沙門・大黒の他には、吉祥天や狸々なども加えられた場合もあった。福神信仰は、能狂言の演目の中に、「福の神」「夷毘沙門」「えびす大黒」などが存在するので、室町時代には京都で「えびすと毘沙門、えびすと大黒」といった一対の福神が登場していたのは明らかである。室町時代末期には、えびすと一対の福神を中心に次々と新しい福神が加えられた。七福神が成立したのは、七が吉数として選択されたのに加えて、巡拝する対象数としても適切だったと考えられ、江戸時代を通して七福神詣が流行し、各地に広まった。

七福神舞は、主として東北地方に分布しているが、ほぼ全国的にみられる。成城大学大学院文学研究科 田中研究室 全国エビス信仰調査報告書『えびすのせかい』に収録された「A資料編V全国エビス信仰一覧表」に記載されているエビスの芸能の件数は、東北地方に一七カ所、関東地方に二カ所、中部・東海地方に一〇カ所、近畿地方に三カ所、中国・四国地方に一カ所、九州地方に三カ所、合計三六カ所である。この三六カ所中、江戸時代から行われていたという伝承を有しているのは、半数に満たない一六カ所で、その他の伝承地では明治、大正、昭和になってから伝播したと伝えている¹¹。東北地方の場合は、かつて小正月を中心に豊作を祈って各戸をめぐる「田植踊」とともに伝承されている場合が多い。

平成七年に国指定重要無形民俗文化財となった、福島県二本松市石井の「七福神と田植踊」は、その種目名からも明らかのように、東北地方を中心に広く分布している初春の豊作祈祝芸である「田植踊」に先だつて、七福神が次々と訪問先の家の座敷に舞い込み、祝言を述べながら寿ぎの舞を演じる。石井の場合、七福神の先導役として農神である稲荷が登場し、続いて毘沙門、弁天、布袋、福祿寿、寿老人、恵比寿、大黒の順番で舞い込み、最後に恵比寿・大黒の連舞で「神上がり」となる。恵比寿舞に歌われる歌の詞章は「チョイトナ 七つ難波の名も高き ハ 西のお宮の若恵比寿 ハ につこかっこと笑うとに」。次の大黒舞歌は「チョイトナ 八つやもなるわが里の 大黒様のおてすきならば 大黒様のごう好きは 赤いまんまで 豆腐汁がごう好きだ」。一神連れ舞の詞章は「ハ お恵比寿のごう好きは 何がさんまでごう好きだ ハ 海辺にくだりしお岩に腰かけ 大鯛小鯛 ひめこのお鯛を釣るのがごう好きだ」というものである¹²。最後に「神上がり」で七福神は退場する。その後、ヒョットコ面の道化役二人が、稲作と養蚕の豊穰を祈願し、次に田植踊の一行が出て稲作の過程を示す田植踊を踊り、最後に余興芸の小唄踊りで終了する。この芸能構成の中心は「田植踊」であり、七福神舞は単なる先導的な役割を果たしているに過ぎないが、えびすは七福神のしんがりを務め、鯛釣りの演技を行っている¹³。

4 その他の祝福芸にみる「えびす」

右に述べた三種類の祝福芸以外に「えびす」を内容としているものは、成城大学大学院 田中研究室による「全国エビス信仰一覧表〈資料編〉」に取り上げられた「芸能」の内容から、すでに記した木偶三番叟、万歳、七福神舞を除いた祝福芸の「えびす」をピックアップしてみた。¹³

青森県 イタコの語り物（イタコが師匠について最初に教えらるるのが「えびす」の語り物であり、かつて「えびす」語りをしながら門付けしてまわった）。

秋田県 明治初年まで「えびしるのとうごろう」という正月の門付芸が行われていた。

福島県 婚礼、年祝い、子供の初節句や初正月などに歌われる民謡「松坂」に「えびす」の歌が入っている。

茨城県 えびす講に歌われる歌。

新潟県 新湊市の漁師の祭りで、不漁時にえびすの神像を漁船に乗せ、神職、舞人、囃子方なども同乗し、大漁旗を立てた数十隻の漁船を従えて海上へ出る。神饌を海中に投げた後、船の舳先で「えびす舞」が舞われる。また、同市の西宮神社祭礼には、人間による「えびす舞」が奉納される。

富山県 稚児舞の一演目として「えびすの舞」が舞われる。
福井県 かつて来ていたデコ芝居の「三番叟」語り（マツ）が演じる「えびす」。

静岡県 かつて、えびす大黒の装束を付けた男二人が、門口に来て「七福神が舞い込んだ」と歌った。

三重県 かつて、四国から首に箱を下げた人形操りの「えびすまわし」が来た。

大阪府 かつて、阿波の木偶まわしが来た。西宮神社祭礼には「えびすまわし」が演じられる。

兵庫県 かつて、各地に淡路からえびす・大黒まわしが来た。

奈良県 かつて、淡路から各地へ木偶まわしが来た。

和歌山県 かつて、淡路から各地へ木偶まわしが来た。

岡山県 かつて、四国から各地へ木偶まわしが来た。

徳島県 かつて、木偶まわし・えびすまわしが門付けに来たが、そのほとんどを三番叟まわしという。また、各地で網元が大漁祈願の人形芝居を催し、その時には必ず「三番叟」がまわされた。

香川県 かつて、多くの地域に阿波・淡路から木偶まわしが来た。木偶芝居も行われた。

高知県 かつて、各地に旅のえびすまわしが来た。

長崎県 かつて、十日えびす・二十日えびす・煤掃きえびすには、えびすの装束をつけた者が門付けに来た。福江市樺島神社例祭には、七福神の乗り初めが行われる。

大分県 かつて、元日にエベスサマが来て踊った。十日えびすにはよそからえびすまわしが来て門付けをした。
宮崎県 かつて、土人形をまわせる門付けが来た。

鹿児島県 かつて、島津光久襲封の慶賀に、えびす踊りが行われ、

また豊漁祈願にえびす歌が歌われた。

右のような結果から、静岡県・三重県あたりを境界線として、東日本と西日本では祝福芸「えびす」の芸態が、全く異なっていることがわかる。東日本では、木偶まわしの姿が見られず、バラエティーに富んだ「えびす」の芸態が分布しているのに対して、西日本の多くの地域では淡路、阿波からやってきた複数人数の「三番叟まわし」と呼ばれる木偶まわし、またえびす人形だけを持った単独の門付けが見られた。その数が多く頻繁であったため、他の「えびす」芸態が行われる余地がなかったようである。九州地方になると少し違っていて、新年や祝い事に、人間が扮するえびす・大黒が姿を現し、領主の祝賀踊として「えびす踊」なども行われていることから、近畿・中国・四国地方に比較して、九州では淡路・阿波の「えびす」の影響が、かなり薄れていたようである。

二 神楽に取り入れられた「えびす」

「えびす」を一演目としている神楽は、ほぼ全国的に分布しているが、特に関東地方とその周辺である長野県、福島県、静岡県、山梨県などを含めた地域に数多く分布している。江戸里神楽系の神楽の中には、「えびす」がさまざまな演目名で演じられており、伝承地域で最も人気の高い演目の一つになっている。

1 関東地方を中心とした江戸里神楽系神楽にみる「えびす」

江戸里神楽系神楽に伝承されている「えびす」、およびそれに相当する演目にはどのような名称が、どの程度みられるであろうか。三田村佳子氏の作成による「里神楽演目一覧」によって検証してみよう。¹⁴

福島県（全57件）伝承地中の「えびす」系演目（以下△内略）↓演

目無9・「事代主」31・「えびす」14・「釣り」1・「漁労」

1・「三穂三崎」1。

茨城県（全15件）↓演目無3・「えびす」5・「蛭子」4・「事代主」

1・「鯛釣り」1・「西の宮」1。

栃木県（全76件）↓演目無6・「えびす」56・「事代主」7・「蛭子」

4・「釣り」2・「漁労」1。

群馬県（全131件）↓演目無22・「蛭子」34・「えびす」33・「鯛釣り」

22・「釣り」8・「事代主」7・「浜遊」1・「西宮」1・「魚

釣」1・「福神」1・「荒ぶる神の平定」1。

埼玉県（全68件）↓演目無19・「三穂崎」14・「えびす」9・「釣」

9・「蛭子」5・「鯛釣り」4・「事代主」4・「魚釣り」2・「三

神」1・「敬神」1。

千葉県（全50件）↓演目無4・「えびす」33・「事代主」6・「蛭子」

4・「鯛釣り」3。

東京都（全25件）↓演目無14・「三穂崎」7・「えびす」2・「鯛釣り」

1・「赤目釣り」1。

神奈川県（全7件）↓演目無3・「三穂崎」2・「えびす」1・「神

遊」1。

静岡県（全1件）↓演目無0・「えびす」1。

山梨県（全85件）↓演目無14・「鯛釣」41・「事代主」15・「魚釣」

7・「蛭子」3・「えびす」1・「御大漁」1・「釣初」1・

「鯛釣」1・「海幸彦」1。

長野県（全11件）↓演目無9・「えびす」2。

新潟県（全159件）↓演目無15・「蛭子」32・「えびす」24・「海幸彦」

22・「魚釣」21・「福神遊」17・「事代主」16・「鯛釣」11・

「漁遊」1。

北海道（全4件）↓演目無1・「福神遊」3。

右、演目名の数から具体的に理解できることは、80パーセント以上の伝承地で「えびす」、またはそれに相当する演目を有していることである。また、「えびす」系統の演目名で「えびす」を称しているのは、181件で31パーセント強である。件数が多い演目名順に記すと「事代主」87件、「蛭子」86件、「鯛釣」83件となっている。「事代主」「蛭子」が多いのは、江戸里神楽の大きな特色となっている。記紀神話の神名を取り入れた内容の結果であろう。都県別で「えびす」の演目名が多いのは、全体が1カ所の伝承で「えびす」を有する静岡県の100パーセントを除くと、栃木県が73パーセント、千葉県が60パーセント、茨城県が33パーセントとなっている。興味深い伝承は新潟県で、全体の90パーセント以上が「えびす」系統の演目を有しながら、「えびす」という演目名は2番目に多い16パーセント強であり、1番「蛭子」から7番「鯛釣」まで、それぞれの件数

が多い上、接近していることである。「えびす」系統の演目無しが、全体の半数以上なのは長野県と東京都だけである。このような結果は、「えびす」系演目を伝承している地域が、海岸線添いに位置していることを示している。

2 茨城県上山川諏訪神社太々神楽の「恵比寿（鯛釣り）の舞」

茨城県結城市上山川諏訪神社太々神楽は、例年四月三日の諏訪神社祭礼に神楽殿で奉納されている。この神楽は十二座で構成され、「恵比寿（鯛釣り）以下（内略）の舞」は第七座に位置している。¹⁵

舞の芸態は、烏帽子に狩衣と面をつけ、釣り竿を持って舞台に登場した恵比寿が、参詣人を海中の魚に見立て、釣り糸の先に紅白の丸餅をつけた釣り竿を舞台下に垂らす。参詣人の有志が、この餌と引き替えに祝儀袋や酒などを釣り上げてもらう。その間に、恵比寿役以外の浄衣を着た人々が、恵比寿のために紅白餅の撒き餌をする時、一般参詣人が争ってこれを拾うことが繰り返えされ、この演目だけが他の三倍におよぶ時間を費やして演じられるが、境内は笑い声で満たされる。この神楽は平成一七年に茨城県の指定になり、伝承者は江戸時代末期から半世襲的な継承が続いており、保存会員の全員が演技、演奏の全てを習得した免許皆伝者である。参詣者を楽しませる工夫や演技面でも優れていると思える理由は、毎年結城市内にある一〇カ所程の神社祭礼に招かれ、太々神楽を奉納していることにもよる。結城市教育委員会編・発行『結城の文化財』によれば、安永九年（一七八〇）、播州から購入したという神楽衣装が残

されていたが、現在は不明であるという。¹⁶この伝承から、神楽の伝播を江戸時代中期以後であることが推測できる。「恵比寿の舞」の位置づけは、大漁祈願に相当するが、最後の第十二座「大山祇の舞」にもさらに盛大に舞台上から参詣人に向かって、山の神の贈物として餅投げが行われる。

「恵比寿の舞」と「大山祇の舞」の大きな違いは、「えびす」には参詣人からご祝儀が渡されている点であろう。参詣人全員を楽しませながら、間違いなくご祝儀を確保する演出は見事であるといえよう。

3 高知県物部村いざなぎ流御祈禱の「えびす神楽」

高知県香美市物部村は、県東部の徳島県（三好市・那賀郡那賀町）との県境に位置し、平地がほとんどない山村である。水田が少ないため米は貴重品であり、伝統的に焼き畑農業で収穫した雑穀を主食としてきた。いざなぎ流御祈禱は、この地域に伝承されている神仏混交の民間信仰である。いざなぎ流の行法を修得した太夫と呼ばれる数人の宗教者が、村や個人に依頼されて神祭り、先祖祭祀、病人祈禱、家祈禱、氏神祭祀、占いなどを行ってきた。高知県立歴史民俗資料館編『いざなぎ流の宇宙 ―神と人のものがたり―』によれば、当初から「いざなぎ流」と称されてきたか否かは別にして、江戸時代初期には、現在の祭式が完成していたという。¹⁷以下、『いざなぎ流の宇宙』によって、いざなぎ流御祈禱儀礼の一端として行われる「えびす神楽」について記すと、概略以下のようにな

る。

いざなぎ流御祈禱儀礼は、一週間がかりの大規模かつ複雑な家祈禱であっても、基本構造を把握すれば、本筋の流れは理解しやすいという。その基本構造は、「取り分け↓精進入り↓湯立て・湯神楽↓礼神楽↓大黒柱の祈り・庚申様の礼拝↓御崎様本神楽・御子神楽↓御子神迎え神楽・天の神行事など・その他の本神楽↓恵比寿神楽↓日月祭↓（取り上げ神楽）↓鎮め↓神送り」であるという（恵比寿神楽の側線は筆者による）。「恵比寿神楽」は、最後に行われる神楽として位置づけられている。いざなぎ流御祈禱の儀礼で、最も重要部分と認識されているのは、祭文を読むことであるが、「いざなぎ流七つの祭文」と称されている祭文の筆頭に、「恵比寿の祭文」があげられ、恵比寿神楽で読まれるだけではなく、「取り分け」「病人祈禱」などでも祭文の最初に読まれている。「恵比寿神楽」が、他の高神にあげる神楽と異なっている点は、舞台の中心に供える供物で、高神に供える米と弓のかわりに、穀物・お金・酒（五品の場合は苧桶に餅・鯛形御幣など）を供え、これらを中心にして神楽を行う。また、高神の神楽で行われる「舞上げ」の代わりに「倉入れ」という儀礼があり、「富男」と称する家の主人（または長男）が粟の穂を髭のようにくわえ、両手で神楽幣を床について馬の格好になり、背中には供物を一種類ずつ乗せて、神楽を執行した太夫に誘導され、歌いながら恵比寿棚の前に行き、前に待ち受けていた主婦に鯛形御幣を渡す。この道中を供物の種類だけ三（五）回くり返し、最後に太夫が徳利を持って「恵比寿の数え歌」を歌

い、恵比寿棚に徳利を供えて笑うと、その場の者全員が太夫に合わせで笑う。

御崎様、御子神様などといった、天の高神が男性（主人）祭祀なのに対して、恵比寿は主婦によって日常的に祀られている神で、家の奥の目の高さに設置した恵比寿棚に、太郎恵比寿・次郎恵比寿・三郎恵比寿・および、その他多くの弊とともに祀る。高神祭祀をしない家では、恵比寿が主神であり、恵比寿は家の外部から富をもたらす神で、「倉入れ」は、富が恵比寿棚へ舞い込む様子を演じたものという。「恵比寿の祭文」には、太郎恵比寿は作り恵比寿、次郎恵比寿は商い恵比寿、三郎恵比寿は獵（漁）恵比寿であると記され、恵比寿棚には太郎・次郎・三郎恵比寿の他に作神、子安神、七夕神などの御幣が祀られている。恵比寿神楽に際しては、「恵比寿の祭文」とともに七夕祭文も唱えられる。「恵比寿の祭文」の内容は、淡路などの「えびすまわし」の文言と似た点が多いばかりでなく、宮崎県の「將軍祭文」の内容にもつながっているという。¹⁸ いざなぎ流御祈禱の伝承地である物部村は、阿波三番叟まわし・木偶まわしの伝承地である徳島県中西部の県境に位置し、雑穀類を常食としてきた厳しい自然環境の土地柄である。そこへ富をもたらす神の「えびす信仰」によってもたらされた、全ての富を残らず取り入れ、地域にふさわしい独自の解釈を加えて租借し、厳肅な修法の最後に「恵比寿神楽」を位置づけ、「倉入れ」によって豊かな気分でき取り入れる。この神楽は、いざなぎ流御祈禱の構成上、不可欠な存在となっている。

三 「えびす」の芸能・その発生と展開

「えびす」の芸能に関する発生と展開を理解する上で、欠くことができない先行研究は、一九六三年に刊行された角田一郎『人形劇の成立に関する研究』と、一九九六年『芸能史研究』132号に発表された山路興造「操り浄瑠璃成立以前」である。¹⁹ 角田は、「えびす」の初筆史料として『御湯殿上日記』天文二四年（一五五五）一月二日条「えびすまいりて、くるまよせにて色々の事申」をあげると同時に、本願寺蓮如の子で河内枚方順興寺住職であった、実従の日記『私心記』でも、同年二月一五日条に「エビスカキ参候。四人^(マ)ニ能サセラル」と記されていることをあげている。しかし、『御湯殿上日記』では、初筆から一〇余年後になつてから、初めて「えびすかき」と記されていることを重視して、「えびす」は千秋万歳と似たもので、謡性の初春祝言を述べたものであり、また、「えびすかき」は、えびすの神人形を舞わせたものであるという推測を記している。「えびすまい」「えびすまわし」は、「えびす」が後に人形戯とむすびついて『人倫訓蒙図彙』に見るような「首掛けの箱人形芝居」を演じて門付けして歩いたとも記している。

一方、山路は操り浄瑠璃が成立する以前の人形戯の歴史を三分割し、各時代の人形戯技法を独立したものと考察している。その区分は以下のようなものである。

① 古代から中世前期の職能者である「くぐつ」が演じた人形戯。

② 中世後期に民間雑芸者である「手くぐつ」が演じた人形戯。

③ 摂津西宮神人「ゑびすかき」が演じた人形戯。

③では、文献史料や絵画資料にみるかぎり、夷人形の姿が見あたらない理由について、次のような推測をしている。西宮神人の本芸は、夷人形を用いた祝福芸であったと考えられるが、芸能としては夷の後に演じられる能による余興芸に人気が集まった。そのような例は、大神楽などにもみられることであり、「ゑびすかき」と称された理由は、夷人形をはじめ、各戸に配る神札、余興の能に遣う人形の諸道具を長櫃に入れて昇いて歩いたためで、「夷昇き」と記すのが実態に近いという。先に記した角田の分析を整理した上で、首掛け箱人形の門付けをした者たち、大型夷人形の祝福芸を演じた者たち、一座を組んで大型人形を遣って能を演じた者たちの全てが、西宮の祝福芸能者たちであったという。西宮の祝福芸能者としては、夷人形を遣って各戸を訪れるのが基本であったはずだが、夷人形による祝福芸は季節的、場所的に制約が多く、早期から京都などの街中では門付けに便利な「首掛け箱人形」を遣って、能などを演じた可能性が高いという。時代が下るとともに、本格的な芸能集団による興行を歓迎する、不特定多数の観客の出現をみるようになり、大型の人形を遣って本格的な興行を目指す職業芸能者のグループが独立し、慶長一八年（一六一三）一月一五日に、能操りを演じる「ゑびすかき」の名人、藤原吉次という者が河内（能操りの人形遣い）目（もく・階級）を受領した。翌慶長一九年には、別の「ゑびすかき」が当時流行の語り物で、すでに三味線と結んでいた浄瑠

璃と提携して参内しており、これは文献上「操り浄瑠璃」の初見であるという。

山路の指摘に対して、筆者が唯一意見を述べられそうな推論は、氏が史料不足で検証できないとした初期「ゑびす」を、千秋万歳に似た人間の芸とした角田の推論を肯定することである。その理由は、先に記した「万歳に取り入れられたえびす」の、大和万歳の詞章に「戎舞」があることから、以下のような推測を試みた。鹿谷勲「大和万歳について」によれば、²¹大和万歳は一四世紀から一七世紀にかけて、春日大社の神主家を訪れ、また、一五世紀には奈良町の声聞師が、大乘院家を訪れて千秋万歳を演じていた。江戸時代になって、窪田や箸尾に定住した大和万歳は、窪田太夫、箸尾太夫の二系統が京都大阪を巡っていたという。現行狂言「夷毘沙門」（大藏流・和泉流の脇狂言）では、有徳人が西宮の夷三郎殿に娘婿をとりたいた祈誓をかけると、自身で有徳人の家に押しかけた夷と毘沙門が福神として家に納まる内容である。えびすは七福神が現在の構成になる以前の室町時代から、福神として家にやってくるという信仰が、京都や大阪周辺にあったことを手がかりに、「えびす」人形を舞わせながら西宮神社の神札を配り、信仰を広める役割を果たした西宮神人とは別に、千秋万歳などが各戸をめぐる述べる祝言の一演目として、「えびす」の装束をつけた者たちがいた可能性を推測してみた。

おわりに

えびす神に対する信仰圏は日本全土におよぶが、その性格は複雑で漁業、農業、商業といったさまざまな生業の人々に支持され、えびす神の全体像を捉えることが困難である。その複雑な性格を反映した故であろうか、えびす信仰の片隅に位置づけられるにすぎない民俗芸能の「えびす」は、芸能種目名として伝承されるには至らなかった。本論執筆の動機となった「えびすまわし」が、「三番叟まわし」「箱まわし」と称されていることから、その一端をうかがえる。「えびす」の芸能が、どのような形式で伝承されてきたかを整理することで、本論のむすびとしたい。

一 木偶による「えびすまわし」

- ① 単独で各戸をめぐる門付け芸。
- ② 「三番叟まわし」「箱まわし」の最期に演じる余興芸。
- ③ 人形芝居の中入りなどに演じられる余興芸。

二 七福神の一神「えびす」

- ① 祭礼の風流行列。
- ② 田植え踊りの露払い的な舞で、しんがりを務める。
- ③ 万歳の一演目。
- ④ イタコの語り物。

三 囃子舞の「えびす舞」

- ① えんぶり・田植踊・綾子舞などの「中入り」として余興芸的に舞われる。

四 神楽の一演目

- ① 関東およびその周辺に分布する江戸里神楽系神楽の「えびす」は、別名「蛭子」「事代主」「鯛釣り」などの演目名で、観客を楽しませることを目的とした道化舞的に舞われている。
- ② 西日本の神楽にも「えびす舞」を演目に加えている場合は多い。

- ③ いざなぎ流御祈祷の「恵比寿神楽」でも、恵比寿神は道化的な役割を果たしている。

五 民謡の「えびす歌」

- ① 祝い歌（松坂）。
- ② 仕事歌（鯨解体のために陸上へ巻き上げる時の歌である口歌・胴突歌など）。
- ③ えびす講で歌われる歌。

右の伝承状況を踏まえた上で、「えびす」の芸能が種目名で伝承されなかった理由について、次のような推測を試みた。

一、いざなぎ流御祈祷「恵比寿神楽」のように、えびす神だけが天の高神と異なる「場所・位置（奥の間・主婦の目の高さ）」で、主婦によって祀られていることから、「えびす神」が、親しみやすい神として扱われる信仰があった。

二、正月に単独で各戸をめぐる、木偶のえびすをまわす「えびすまわし」は、かつて西宮神社の布教を目的として神札を配布し、

祝儀をもらい受ける神人であり、賤視の対象となっていた。布教が行われなくなった時代になっても、正月にめぐって来る「えびすまわし」に対しては賤視の意識が働き、中心芸である「えびす舞」を最後に演じて、「三番叟まわし」「箱まわし」と称するようになった。

三、江戸里神楽系神楽の「えびす」が「ひるこ」「事代主」「鯛釣り」などの演目名でも演じられているのは、神楽全体が記紀神話の神々による構成であること他に、氏子の中にえびす神に対する別扱いの意識が働き、殊更にご祝儀を出す演出をしている伝承地もみられる。

本論作成の過程で、多くの方々にご教示、ご協力をいただいた。特に、上島敏昭氏・森林憲史氏・写真を提供してくださった梅野光興氏・懸田弘訓氏・辻本一英氏に記してお礼申し上げます。

- 1 『月刊 文化財』三月号(五四六号)(文化庁文化財部監修 第一法規平成二二年三月一日) P.18
- 2 上島敏昭(坂野比呂志大道芸塾へ浅草雑芸団) 編集・発行「大道芸アジア月報」二〇〇九年三月「大道芸案内」参照。
- 3 辻本一英『阿波のでこまわし』(解放出版社 二〇〇八年六月一五日)。
- 4 武蔵野美術大学 民俗資料展 ぐらしの造形18 『笑うエビスー福神の画像学』(神野善治企画構成 武蔵野美術大学資料図書館民俗資料室 二〇〇七年八月四日)。

5 註3に同じ。P.103~105 えびすまわし歌の詞章「福の神が 舞い込んだ 舞い込んだ 西宮のえびす三郎左右衛門之丞は 生まれ月日をいっぞと問うたら 福徳元年正月三日 安々とご誕生なされた お庭ならしにひと踊り 鶴と亀とが舞い遊ぶ 沖は大漁 丘は満作 この家のお蔵に大判小判が ざくざく それざくざく 先ずはめでたい 家内安全 商売繁盛 おめでとうございます」。

6 『大衆芸能資料集成』第一巻(三隅治雄 六戸部信淳 岡田 弘編 三二書房 一九八〇年六月一五日) P.12~17

7 註6に同じ。P.23(「三河万歳」)・P.177~178(「尾張万歳」)・P.260~261(「越前万歳」)。

8 鹿野正男「会津萬歳師聞き書(昭和五十八年九月)」「まつり」68号 特集 祝福芸二〇〇六年二月二〇日) P.29~41

9 囃子舞は、さまざまな舞の扮装をした者自身が「何々舞を見さいな〜」と、舞手自身で唱えながら登場し、周囲を取り巻く人々に囃されながら扮装の物まね舞を演じてみせる芸能で、その歴史は古く、最古の狂言台本である『天正狂言本』や江戸時代初期の『大蔵虎明本』にも曲名や詞章を見ることが出来る。

10 註9に同じ。P.200~201(「秋田万歳」)。

11 『えびすのせかい』全国エビス信仰調査報告書(編・発行 成城大学大学院文学研究科日本常民文化専攻 田中宣一研究室 二〇〇三年三月一〇日) P.72~269

12 『七福神信仰事典』(宮田 登編 戎光祥出版 一九九八年一月一日) P.182~248

- 13 註11に同じ。
- 14 三田村佳子『里神楽ハンドブック』（おうふう 二〇〇五年七月五日）P. 437～508
- 15 第一座「五行の舞（四方固め）」第二座「猿田彦（天狗）の舞」第三座「翁（劔）の舞」第四座「墓目（弓引き）の舞」第五座「稻荷（男神）の舞」第六座「稻荷（女神）の舞」第七座「恵比寿（鯛釣り）の舞」第八座「諾尊の舞」第九座「冉尊の舞」第十座「鈿女の舞」第十一座「手力男の舞」第十二座「大山祇の舞」。
- 16 中村茂子「関東神楽の源流・土師一流催馬楽神楽の影響からみた茨城県の十二座神楽」（実践女子大学『美學美術史學』第二十一号 二〇〇七）P. 49～67
- 17 展示解説図録『いざなぎ流の宇宙―神と人のものがたり』（高知県立歴史民俗資料館編・発行 平成九年一月一四日）。
- 18 『いざなぎ流祭文帳』（斎藤英喜・梅野光興編 高知県立歴史民俗資料館 一九九七年一月一四日）P. 105～108
- 19 角田二郎『人形劇の成立に関する研究』（旭屋書店 一九六三年八月一五日）「テクグツとエビスカキ」P. 529～582
- 20 山路興造「操り浄瑠璃成立以前」（『藝能史研究』132号 一九九六年一月二〇日 藝能史研究会）P. 1～35
- 21 鹿谷勲「大和万歳について」（『まつり』70号 特集 続祝福芸 二〇〇八年十一月一〇日）P. 47～68



福島県二本松市 石井の七福神舞
(写真提供：懸田弘訓氏)



茨城県結城市上山川の太々神楽
「えびすの舞」(筆者撮影)



福島県二本松市原瀬の太々神楽
「えびす舞」(写真提供：懸田弘訓氏)